

マタイの福音書の 5 章の 13 節から見て参ります。山上の説教の続きです。3～12 節のところは、八つの幸福の教え『八福の教え』、幸福に至る教えということで『至福の教え』とも言ふところの話を先週見たわけです。その流れを受けて今から 13 節を見て参ります。これは先週も話した通り、イエス・キリストの宣教の第一声に基づくものであります。第一声とはバプテスマのヨハネも行ったものと全く同じです。「**悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。**」この「悔い改めなさい」という部分が実は山上の垂訓に当たる部分です。特に先週の『八福の教え』に当たる部分です。「なぜそれが悔い改めなのか」と思われると思いますけれども、『悔い改める』という言葉はギリシャ語では「メタノイア」と言います。皆さんには何度もこの言葉をご紹介します。是非覚えて頂きたい言葉です。で、「メタノイア」の意味ですが、それは単純に「考え方を変える」という意味であります。又は「方向転換をする」という意味であります。ただ罪を後悔して、いつまでも罪責感にさいなまれながら、「なんてことをしてしまったのだろうか。なんて私は馬鹿だったのだろうか。あんなこと言わなければ良かった、やらなければ良かった。」というのが悔い改めではありません。又は「二度としません。」というのも悔い改めではありません。私たちにはそんなことは出来ません。二度も三度もやります。ですから、そういうことを『悔い改める』というのではありません。出来ないことを言うてはいけません。そうではなくて、神のあわれみにすがって、神様のお考えに沿うようにこれから私も考え方を変えます。「こんな私でも神様は見捨てない。むしろ赦して下さい、又やり直しをさせて下さる。罪悪感なんて持たなくていい。」なぜならばすべての罪はイエス・キリストが十字架の上で負って下さったから。この事実に基づいて私たちは完全なる赦しを頂いています。ですからもう過去のことを振り返って、くよくよしたり、嘆いたり、後悔するのではなくて、もう既にその罪はイエス・キリストの十字架の贖いによって完全に赦された。だから新しく、新たな思いで、また神のあわれみにすがりながら歩むことができる。それが「考え方を変える」、「悔い改める」若しくは「方向転換」という意味です。これまでのいろいろな考え方が、私たちの中に凝り固まっています。染みついているわけです。見方も変えなくてはいけません。意識も変えなくてはいけません。見識も変えなくてはいけません。それが「悔い改める」ということです。方向転換をする。今までの人生の方向性ではなくて、神様が導かれる、神様が喜ばれる、神様が指し示すその方向性へと、人生を修正していくわけです。それが「悔い改める」ということです。で、勿論そういった方向性というのは、神の言葉に指示されております。ですから神の言葉を私たちは読み、学び、そこに書かれている方向に沿うように、神様の考え方・見方もすべてこの聖書の中に散りばめられております。まとまっているわけです。ですから私たちはそこから、神様が何をお考えなのか、何を望んでおられるのか、何を願っているのかということを知って、それに沿うように、合わせるように、考え方を変える。それが『真の悔い改め』であります。私たちの品行をどうのこうのするという意味ではありません。私たちの過去を清算するとか、そういったことは一切含まれません。そんなことが出来るならば、そもそも救いなんて必用ないわけです。イエス・キリストなんて要らないわけです。でも、私たちにはイエス・キリストが必要です。そして「このままではいけない」ということは分かっています。考え方を変えなければ、方向を変えなければいけない。人生の目標も人生の行き先も変えなくてはならない。そのためにイエス・キリストが『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』と言って、具体的に悔い改めるとはどういうことか。まずは『八福の教え』をもって説いて下さいました。『**心の貧しい者は、幸いです。**』今までそんなこと考えたことも無かったわけです。この意味は先週説明しましたから、繰り返すことは致しません。心というのは特に『**霊**』という言葉ですから、「**霊**において貧しい者、霊的に破

産者していると、(靈的に) 自己破産している者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」全然違う考え方を持つわけです。『悲しむ者は幸いです。』そんな考えも今まで無かったかもしれません。『柔和な者は幸いです。』『義に飢え渴く者は幸いです。』『あわれみ深い者は幸いです。』『心のきよい者は幸いです。』『平和をつくる者は幸いです。』『義のために迫害されている者は幸いです。』そんなことありえないと。でもそれが幸いだといエスはおっしゃいます。そのように、この世と全く異なる考え方をする。それが『悔い改める』ということです。全く違う価値観を持つということです。ですからイエスの説かれている教えに対して、もし私たちが違和感を感じるのはもちろんですけど、でも違和感じゃなくて抵抗感を感じているならば、その時点で私たちはおかしい状態にあるということですから、悔い改めなければいけません。違和感をもって然るべきです。私たちが聞いたこともない教えに、初めショックを受けるわけです。「一体どうしてそれが幸いなんですか。なぜそんなことで幸福になれるんですか。ありえません。逆じゃないですか。むしろそんなことをすればこの世では不幸になるだけじゃないですか。」違和感を感じたとしても、でもイエス・キリストに従おうとする者は、抵抗感を感じてはいけません。「違和感を感じても、頭ではなかなか納得いかなくても、承服できなくても、あなたがおっしゃることなら、私はつべこべ言わずに従います。」「抵抗感を覚えることなく、違和感を持ちながらも、それでもあなたのおっしゃることならば間違いはありません。正しいに決まっています。私はあなたを信頼していますから。あなたは私の為に十字架にかかって死んで下さったほどのお方ですから、私のちっぽけな頭で考えもつかないことを考えられる方です。私が見えないものもすべてご覧になる方。分からないこともすべてお分かりになっている方。私が出来ないことのすべてをお出来になる方。そんなあなたがおっしゃることならば、私は従います。」まあ、そのようにして、この世とは全く違う考え方をする。全くのパラドックス、逆説ではありますが、それに従うことが『方向転換をする』ということです。考え方を変える、見方を変える、悔い改めるということです。で、そのように悔い改める者は天の御国の住人となるわけです。天国人というのはまさにこの『八福の教え』に従って幸福な人たちのことを指します。祝福されている人たちとは、天国人です。天の御国の住人。そういった天国人の性格、キャラクター、特質というのが、先週学んだ『八福の教え』です。私たちのキャラクター、私たちの性格、特質とこの『八福の教え』、是非重ねて見て下さい。比べて見て下さい。違っていたら、直せばいいんです。それに、この教えに、自分を合わせるように、まさに考え方を変える、悔い改めればいわけです。この『八福の教え』、八つのクリスチャンの特質と言っても良いと思います。これは、チャールズ・フィンドルというアメリカの著名な牧師はこのように形容しました。「イエスが描いたしもべの肖像画である」と。それが『八福の教え』です。イエス・キリストは天の御国で一番偉い人、これは人に仕える者である、しもべである、奴隷である、と言いました。「あなたがたの内に、あなたがたの中で一番偉くなりたいと思うものは、人に仕える者となりなさい。」それが天の御国の住人です。イエス・キリストも仕えられるためではなく、仕えるためにこの世に来られたお方です。天国人、勿論それはイエス・キリストのことでもあります。そのイエス・キリストが「しもべである」と言われているわけです。私たちがイエスに倣う者として、繋がる者として、属する者として、それがクリスチャンという語意であります。ですから、イエスがしもべであるなら、私たちもしもべであるべきです。で、イエスはまさに「しもべとは何たるものか」を教えるだけではなくて、自ら模範をもって示されたわけです。『心の貧しい者は幸いです。』から始まって、最後は『義のために迫害されている者は幸いです。』すべてイエスの生涯に見ることが出来ます。ですから言い方を変えれば、これらに従うということは、イエス・キリストの似姿に変えられるということ指すわけです。

その『八福の教え』の具体的な適用というのが13節以降の内容となります。天の御国の住人の性格、キャラクター、特質を先週学んだのですが、そういう人がこの世においてどのように振舞うべきなのか、どのように生きるべきなのか、どのようなライフスタイルを送るべきなのか。その具体的な適用が13節以降の

内容となります。

13 : あなたがたは地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。(マタイ 5 : 13)

この『地の塩』という言葉はあまりにも有名な言葉となって、今では日本語にもなっています。キリスト教用語が、今は日本語として定着しました。広辞苑を見て頂くとこの言葉が、マタイ伝 5 章からとられたということが明記された上でこのように定義されています。『地の塩とは、塩が優れた特性を持つところから転じて、広く社会の腐敗を防ぐのに役立つものを例えている語である』と。ですからこれは一般的にも、クリスチャンでない人たちでも使える言葉、既に使っている言葉というふうに広辞苑にも載っているわけです。まあ勿論、塩というのは防腐剤に使われるわけですから、まさに社会の腐敗を防ぐのに役立つもの、それは正しい理解であります。クリスチャンとはまさにそのような存在でなければならないと。

まあ塩について少しだけ皆さんにお話ししたいと思います。塩というのは人間にとって最も身近な存在でありますし、塩が無ければ人間は生きていくことができません。血液の中にも塩はあります。汗の中にも塩は含まれています。何らかの形でこの塩という、塩分というものが人間の臓器にも良い影響をもたらしているわけです。勿論取り過ぎたらかえって害になりますけれども、ただ必要不可欠なものであることは間違いありません。人間の体が健全に機能するためには、この塩というものは必要不可欠であります。古代ローマにおいて兵士への給料として『塩』が支給されたということは皆さん聞いたことがあると思います。ラテン語で塩のことを『サル』”sal”と言います。そこから英語の『サラリー』”salary”が勿論生じました。それくらいのごことは皆さんも聞いたことがあると思います。それだけ塩は貴重なものだったということはお分かりだと思います。食品に関してもこの『塩』に由来する言葉が沢山今日に残っています。それはもちろん『サル』というラテン語から来ている言葉なんです。例えば『サラダ』それも塩から来ています。また『ソース』『サルサ』『ソーセージ』『サラミ』。全部これらは、『塩』由来の言葉です。ですから私たちにあって身近なものであるということは、言うまでもないことです。そして必要不可欠なものであるということも確かであります。興味深いことに『塩』というものは結晶で出来ているのですが、その結晶を見ると正六面体の結晶で「完全な姿」ということで古代から塩というものは、いろんな宗教でも重んじられて来たわけです。「清めの塩」とか。まあ日本の宗教にも塩が多用されるわけですが、世界の宗教でもこの『塩』というものが特別なものとして重宝されて、用いられているわけです。で、聖書の中で特に旧約聖書の中に『塩』に関する言及が沢山見られますので、是非ともいくつかを皆さんにご紹介しておきたいと思えます。『塩』という言葉は旧約聖書の中には 41 回使われております。そのすべてを今から見たいわけではありません。ただ新約聖書の中には『塩』という言葉は、今日のテキストの**マタイ 5 : 13**を含めて 6 箇所しかありません。ですから『塩』について聖書から学びたいならば、どうしても新約だけではなく、旧約聖書の知識が必要であります。聖書を解釈する上で一番大事なものは、聖書です。“聖書は聖書をもって解釈すべき。”これが鉄則、原則であります。ですから旧約聖書の中から私たちは『塩』に関する言及を見ることによって、新約聖書にある『塩』の使い方、『塩』の意味合い、そのへんを知ることが出来ますので、その助けとなる聖句を今からいくつか皆さんに取り上げて見たいと思えます。先ずは**レビ 2 : 13**。

13 : あなたの穀物のささげ物にはすべて、塩で味をつけなければならない。あなたの穀物のささげ物にあなただの神の契約の塩を欠かしてはならない。あなたのささげ物には、いつでも塩を添えてささげなければならない。

穀物のささげ物。麦によるものです。これでパンを焼いたりする時もそこに『塩』を含めなければならないと。神へのささげ物はすべて『塩』で味付けしてささげなければならないと言われてますが、この『塩』というのは、神との契約を表しています。昔から古代の人々にとって『塩』というものは、契約のシンボル若しくは友情の象徴でありました。その理由というのは、『塩』というものは、火によっても、時間によっても、破壊することができないもの。ですから古代においては、存在した如何なる方法をもっても壊されることのないもの。だからそれが破られることのない契約、裏切られることのない友情というふうにシンボル化されたわけです。で、これは神との間においても同じで、神様がご自身の民を決して忘れてたり、見捨てたり、その契約を違^{たが}えるということはない。そのシンボルとして『塩』を使ったわけです。

民数記 18 : 19. そこには、こう書いてあります。これも神の律法、“トラー”の一部です。

19 : イスラエル人が主に供える聖なる奉納物をみな、わたしは、あなたとあなたの息子たちと、あなたとともにいるあなたの娘たちに与えて、永遠の分け前とする。それは、主の前にあって、あなたとあなたの子孫に対する永遠の塩の契約となる。」

このように『塩』に関しての言及が沢山あります。特に旧約の律法の書と呼ばれる『モーセ五書』“トラー”と呼ばれる部分に多く見られるわけです。そういった『塩』に関する使い方、理解、概念、意味といったもの、それをしっかり皆さんに踏まえて頂いて、イエスの教えを聞く者たち、彼らはユダヤ人です。ユダヤ人の『塩』の概念、これを持たなければ私たちは、ユダヤ人のメシヤのメッセージを正しく理解することはできません。異邦人の頭で、「勝手に塩とはこういうものだ」みたいなイメージで、自分の先入観、主観で聞いたら、私的解釈になってしまいます。あくまでイエス・キリストは、旧約聖書をベースに教えを説きますし、また聴いている対象はユダヤ人たちですから、ユダヤ人たちにおいて『塩』とはどういうものか、そういうことが私たちの頭の中にも置かれていないと、聖書は正しく理解できません。

マタイ 5 : 13 では、

13 : あなたがたは地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。(マタイ 5 : 13)

先程の広辞苑の説明では『塩が優れた特性を持つところから転じて、広く社会の腐敗を防ぐのに役立つものを例えている語である』と。勿論それも間違いではないということではありますが、ただ『塩』と言う時に、私たちは先ほど読んだような『契約の塩』という概念。契約の民・イスラエル人、かれらは神から使命を受けておりました。その使命というのは、神と契約した者は神を代表する民として神の御心を行う者、全世界にイスラエルの神を証しする者として、証し人として、メッセンジャーとして、置かれたわけです。実際にそのような命令がレビ記や民数記、申命記に規定されているわけです。イスラエル人は何のためにこの世に置かれているのか。それは神を代表し、神を証しするために、置かれている。ですからイエスが「塩けを失ったら、その塩は外に捨てられる」と言われたわけですがけれども、その”塩け”というのは、もう分かったと思いますが、日本人にはちょっと分かりにくい言葉だと思います。“塩が塩けを失う”、あり得ないですね。実際に“塩が塩けを失う”なんてことはあり得ないことですがけれども、しかし実際には“塩が塩けを失う”というのは当時の聴衆たちにしてみたら非常に分かり易い話だったわけです。というのは、当時の『塩』というのは、いわゆる“岩塩”というものです。若しくは“土に混じった塩の結晶”と言った方が良くと思います。その『塩』を取り出すための精製法というのは、まだ発達もしておらず、特に貧しい人たちは純粋な塩の結晶を手に入れることは無く、沢山の土などに混ざった非常に純度の低い

『塩』を使っていたわけです。ですから、『塩』そのものというよりも、”塩と土“若しくは”砂“若しくは”岩“といったようなものの化合物。それを彼らは使っていたわけです。で、そこから『塩』が結晶として浮き上がってきますので、その『塩』を彼らは使ったわけです。『塩』よりも”土や砂“が多く混じっているならば、当然その塊りには”塩けが少ない”と言えるわけですので、そのようなものは役に立たないといえるわけです。塩分を含んだ土の塊り、若しくは泥の塊り、そこから浮き上がってくる結晶をどんどん使って行けば、必然的に塩分は無くなっていくわけです。もう塩の結晶が浮かび上がってこなくなった時、もうその塊りは、ただの土の塊、ただの砂の塊り、ただの石の塊りということで、もう役に立たないわけですから、それは外に捨てられてしまうわけです。ですからイエスが言う「塩けを失う」とはそういう意味です。そしてそれはイスラエル人はよく分かってました。私たちの存在目的、存在意義はなんであるのか。それはこの世にイスラエルの神、主ヤーウェを伝えることである。イスラエルの神とはどういう神なのか証しすることである。イスラエルの神のメッセージを伝えるものである。そのような役目を果たさなくなったら、当然役に立たないものとして外に捨てられてしまうわけです。このことを私たちクリスチャンにも、自分たちにも当てはめて考えて頂ければと思います。まあ『塩』と『地』、すなわち“泥”なり“土”なり“砂”、これはまったく異なるものです。聖書の中でユダヤ人でない異邦の民、異教徒のことをよく“地の民”と言います。“地の民”という聖書の表現は、これは神を知らない異教徒・異邦人を指す言葉です。でもイスラエルは“地”ではなくて、“塩”であると言われているわけです。あなたがたは“地”とは違う存在である。あなたがたはこの世とはまったく違った存在である。イエスはそれを『八福の教え』で表したわけです。あなたがたはこの世とはまったく違う存在である。『心の貧しい者は幸いです。悲しむ者は幸いです』というふうにしてですね。「あなたがたは“地”とはまったく異なる“塩”である」と。「まったく違う特質・性質をもった存在である。ですからこの世と違った存在でなければ、存在意義も存在価値もないと言っているわけです。もしあなたがたがこの世とまったく同じものになってしまうならば、同化してしまうならば、妥協してしまうならば、(またパウロの言葉を借りるならば) この世と調子を合わせてしまうならば、あなたがたには何の価値も無い。」とイエスは言われているわけです。クリスチャンと呼ばれる者はこの世の人たちと全く異なる人たちであります。『あなたがたは地の塩である』と。「地の塩になりなさい」とは言いませんでした。「あなたがたは地の塩である」とハッキリと断定して下さってます。「もうクリスチャンであるならば、もうあなたは“地の塩”である」と。「これから私たちが“地の塩”になろう」と頑張るのではありません。「一生懸命この腐敗した社会において防腐剤になろう」と。「そのために宗教熱心になって、頑張って教会に通って、毎日聖書を読んで、祈って、礼拝に集って、何としてもこの世において防腐剤になるために努力しよう。他の人と違ったように聖人君子になろう。」それが私たちが目指すべきところではありません。そうではなくて、イエスは既に「あなた方はもう既に地の塩である。」と言われてます。「地の塩になりなさい。」という命令はここには無いということを知って下さい。このことを多くの人は誤解しています。クリスチャンは“地の塩”にならなければいけないですけども、これからはなるものではありません。「もう既にあなたは地の塩である」と、イエスは宣言しているのです。むしろイエスがここで言われているのは、「地の塩になれ」という命令ではなくて、「塩けを無くしてはならない」と命令しているわけです。“塩けを無くすこと”への警告がなされているだけです。マーティン・ロイドジョーンズと言う人は、こう言っています。彼の『山上の説教』というタイトルの講解書がこの『山上の説教』の決定版の講解書だと言いました。先週お話ししました。で、その本の中に出てくる言葉です。『キリスト者はキリスト者であることによって自動的に社会に影響を及ぼすのである』と。キリスト者、クリスチャンはクリスチャンであることによって自動的に社会に影響を及ぼすのであると。クリスチャンはクリスチャンであればいいんです。特別社会に影響を与えるようなことを大々的にするまでもなく、特別社会の腐敗を防ぐために何か一大キャンペーンみたいなことをするまでもなく、(勿論そういうことをしてはい

けないと言っているわけではありませんが、そういうことをしなくても)、ただクリスチャンがクリスチャンとして生きるだけでもう十分に地の塩として機能するんだと言ってるわけです。自動的に社会に影響をもたらす。もしあなたがクリスチャンならばです。「そうですよ。私はクリスチャンです。だって何年前前にイエス・キリストを主と信じて告白しました。信仰告白しました。洗礼も受けました。教会員にもなりました。私はクリスチャンです。」勿論あなたはクリスチャンかもしれませんが、ロイドジョーンズが言っている意味をもう一度考えて頂きたいと思います。『キリスト者はキリスト者であることによって。』キリスト者がキリスト者でない場合もあるわけです。クリスチャンであるにもかかわらず、クリスチャンらしからぬ発言をする。クリスチャンであるにもかかわらず、クリスチャンらしからぬ生き方をする。クリスチャンであるのに、キリストとは全く違う考え方で生きるということは十分考えることです。で、そうしているうちに私たちはこの世と全く同じものに成り下がってしまいます。また元に戻ってしまうわけです。“塩けを失ってしまう”わけです。ですから「塩けを失わないように、キリスト者はキリスト者であれ」と。「キリスト者であり続けよ。どこにいようとあなたはクリスチャンであれ。だれを前にしてもあなたはクリスチャンであれ。」「この人の前では私はクリスチャンでなくなります」とか、「月曜日から私はクリスチャンでなくなります。でも日曜日になったらまたクリスチャンになります。」それは日曜大工ならぬ、日曜クリスチャンという人たちであります。でも日曜大工が本物の大工でないように、日曜クリスチャンは本物のクリスチャンではありません。ですからキリスト者はキリスト者であること。これが一番大事です。これが地の塩として塩けを失わない秘訣であります。もしあなたが塩けを失ったらどうになってしまうのか。それはイエスが**マタイ 5:13**の終わりの部分で言われてます。「外に捨てられて、人々に踏みつけられる」と。結局キリスト者がキリスト者でなくなってしまうと。自滅の道しか無いということです。キリスト者がキリスト者であるということは、勿論簡単なことではありません。だれの前でもクリスチャンであるということを表明するという事は、決して簡単なことではありません。そのことによって人間関係を失うかもしれませんし、馬鹿にされるかもしれませんし、またいろんな不利益を被るかもしれません。でも、もしあなたが塩けを失ってしまうならば、「変に思われたくないからクリスチャンであることは伏せておこう」とか、「不利益を被りたくないからクリスチャンであることは黙っておこう」。もちろん宣伝したりする必要はないですけども、ただ敢えて伏せるとか意図的に隠すということをするとうどうなるのか。あなたは外に捨てられて踏みつけられることになります。このことを私は経験的に知っています。これが正しいということを知っています。皆さんもしかしたら経験があるかもしれません。キリスト者がキリスト者で無くなる時、外に捨てられてきつと踏みつけられるという思いをしたいと思います。「こんなことだったら最初からクリスチャンだと言っておけば良かった」とか、「もう頭から表明しておけば良かった」。下手に隠して、下手に誤魔化して、黙っていたがゆえにこんな惨めな思いをしてしまうなんて。そういうことが皆さんの経験にもあるかもしれません。『塩』というのは先ほどもお話しした通り、人にとっては欠かせないものであり、命にもかかわるものであり、また結晶としても完全体であります。それは他ならぬイエス・キリストのことも表すわけです。イエス・キリストはまさに“地の塩”となられたわけです。私たちと同じ人の姿をとって、まさに人間の中に神が住んでくださったわけです。イエスという肉体の中に神の御子が住まわれたわけです。イエス・キリストはそのようにして“地の塩”として地上生涯を歩まれ、そしておびたしい人たちに、“地の塩”としての影響を“塩け”をもってもたらしたわけです。その影響は今日にも及んでいるわけです。それが社会の腐敗を防ぐということにも勿論なってると思いますし、またそれが“塩”という味付けをして実に“味のある人生”、“おいしい人生”、そのような祝福ももたらしていると思います。“キリスト者として塩けを持つ”ということは、まさにイエス・キリストのことを表し、イエス・キリストの影響をもたらす者であり続けるということです。私たちはいろんな影響を人に与えることができます。それは良い影響もあれば、悪い影響もあると思います。もしクリスチャンがキリストの影

響を与えないならば、それは“塩けを失った地の塩”と同じであります。皆さんにこのことを考えて頂きたいと思います。あなたは人にどんな影響を与えているでしょうか。キリストの影響を与えているでしょうか。もしキリストの影響を与えていないならば、あなたは“塩けを失った地の塩”です。それは外に捨てられてしまうもの、人に踏みつけられてしまうものです。自分の考え方の、自分の思想の、自分の価値観の、自分の趣味の、いろんな自分の影響を人に与えることができるかもしれません。例えばクルマ好きであればその影響は親しい者たちにいくわけです。なぜならば車の話ばかりするので、聞いている者たちも車に関心を持って、「自分も車が欲しい」とか、一台どころか2台も3台も欲しいということになるわけです。もしあなたがイエス・キリストの話ばかりしたらどうでしょうか。勿論それを歓迎する人は少ないかもしれませんが、でもそれこそがまさにキリストの影響を与えるということです。皆さんは普段人にどんな話をしているでしょうか。何について多くを語っているでしょうか。キリスト以外の事ばかり語っていれば勿論その影響がその人にいくわけです。そのことも日常的に吟味しなければいけません。普段私は人にどんな影響を与えているだろうか。会話の中だけではないですね。最近はソーシャルネットワークも人々がよく使うようになりましたから、例えばツイッターとかフェイスブックであなたが発するその情報。それを見て、それを聞いて、それを読んでどんな影響を人は受けるでしょうか。キリスト以外の影響を与えているならばそれはもはや“地の塩”として“塩けを失った状態”であると。キリストの影響を与えることが私たちに求められていることです。そうでなければ考え方を変えなさい。つまり悔い改めなさいと。天の御国が近づいたから、ということです。あなたが本当に幸いな者となりたければ、祝福された幸福な者となりたければ、悔い改めて、そして先ずはこの『八福の教え』にたつて、そして先ずはそれを自分に当てはめる上では、“地の塩”となることから始めなければいけないということです。“地の塩”としてキリストの影響を周囲に与えているだろうか。あなたのやることなすことで、「あなたが素晴らしい」と称賛されているならば、それは残念なことです。でも、あなたのやることなすことで、「キリストが素晴らしい」ということになっていくとするならば、それは本当に素晴らしいことです。それが神に栄光を帰すということです。「この人がすごいから。この人が有能だから。」ではないですね。イエス・キリストの影響をもたらすということは、まさにイエス・キリストがどんなに素晴らしいお方なのかを証しするということです。

で、同じことをイエスは今度は『世界の光』という言葉を使って表現しています。マタイ 5 : 14~16 に

14 : あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。

15 : また、あかりをつけて、それを柁の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。

16 : このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

ここでもイエスの命令は、「世界の光になりなさい」という命令ではないところです。むしろここでの命令は「その光を隠してはなりません」というものです。「地の塩になれ」という命令ではなかったという話をしました。むしろ「塩けをなくしてはならない」という命令・警告だったということです。同じように「世界の光になりなさい」とは命令されてません。もう既にあなたがたは世界の光です。イエスを信じた時点であなたがたは世界の光。なぜならばイエスご自身も「わたしは世界の光、世の光である」とおっしゃってます。イエスが世の光ならば、私たちクリスチャンも必然的に世の光になるわけです。その光を隠してはならないと。これも地の塩と全く同じことを言われているのです。『山の上にある町は隠れることができません』とありますけれども、当時は山の上に町が建てられていたわけです。エルサレムも山の上、

シオンの山の上に建っていました。標高は 800m位のところにエルサレムという町が建てられていたわけです。同じようにクリスチャンたちも、もう既に高いところに建てあげられている者だということを感じて欲しいと思います。要するに目立つ存在として、もう既にクリスチャンは建てられているということです。それはあなたが望まなくてもです。クリスチャンは望むと望むまいと、もう既に山の上に建てられた建物と同じですので、もう目立つ存在として光を証しする機会が与えられているわけです。「私のような者はまだまだ」みたいな偽りの謙遜、虚勢を勿論張って、片意地張って証しするなんてことも必要ありません。もう黙っていても目立つ存在ですから、人からも聞かれるでしょうし、また自然にあなたは世界の光について話すことが出来ると思います。その上でこの**マタイ 5:15**を見て頂くと『**また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。**』この柵というのは、ランプを想像して頂きたいと思います。ランプの灯火の消火道具、当時は陶器でランプが出来ていたわけですが、その陶器に油を満たしてそこに芯をつけて火をつけたり、貧しい人たちは専用のランプを持てなかったのも、普通に陶器のお皿の上に油を満たしてそこに芯をつけて火をともししていた。でもそれは大変危険な状態なので火事になりかねません。ですからすぐに消火できるように柵を用意したわけです。柵というのはイメージ的にはボウルのようなものを今頭に思い浮かべて頂きたいと思います。そのボウルをかぶせることで空気を遮断して火を消すと。ランプを覆いつくすことのできる大きなものを想像して頂きたいと思います。もちろん息で吹き消すことも可能ですが、その場合は非常に匂いもきつかったり煙もでたりするので、一瞬にして柵と呼ばれるボウル状の消火道具というものをかぶせることで、あっという間に火を消すことも出来るわけです。匂いもそこで発生しないように抑えることも出来るわけです。そういう道具が“柵”というものだど頭に留めておいて下さい。その上で、『**あかりをつけて、それを柵の下に置く者はない**』と。これはまさにアイロニー”irony” (皮肉) というものです。普通あり得ないということです。折角火をともしたのに、その火をすぐに柵の下、すなわち消火道具で覆い隠すなんていうことはしないということです。今みたいにライターでパッと火がつく時代ではありません。一生懸命火打石でなんとか火花を散らして火をようやくつけて、ようやくそれでランプに火が灯る。でもそれをすぐに柵の下に置くといことは、蓋をかぶせて火を消してしまう。そんな無駄なこと、意味のないことは普通しないでしょう、というのがここでのアイロニー (皮肉) であります。ですからここでは、そんな愚かな馬鹿な真似は誰もしない。それと同じようにあなたがたも世界の光なんだから、わざわざ自分の光を隠すようなことはすべきではない。それほど愚かしいことはない。無駄なことではない。折角救われたのに、ようやくクリスチャンになれたのに、わざわざその喜びを隠す必要はない。M 姉のように「ハッピー、ハッピー」でいいわけです。隠す必要はないわけです。別にクールを装う必要もないわけです。本当に嬉しいから黙ってられない。おかしい人と思われても。それでも私たちはその喜びを爆発させて、そしてその光を放ちたいわけです。ですからここでは、先ず私たちは世界の光であるから、光になろうなんてことを考えなくてもいいと。黙っていてもクリスチャンは世界の光である。それはむしろ隠せないものである。で、その光を具体的に 16 節では『**人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。**』と言われてます。これは具体的に光を灯す、光を放つとはどういうことかということイエスが説明されてます。『**あなたがたの良い行いを見て**』とありますけれども、これも既に起こっている良い行いという表現です。ですからこれから人々が感心するような、感激するような、感動するような良い行いをしなさいという勧めではありません。『**あなたがたの良い行いを見て**』は、もう既に起こっている良い行いです。良い行いというのは、私たちが判定するものではありません。それは神ご自身が判定するもので、神ご自身が既に備えられているものであります。具体的にはその良い行い、それはもう『**八福の教え**』でイエスが説かれています。『**心の貧しい者は幸いです**』から始まって『**義のために迫害されている者は幸いです**』、この八つのポイント、八つの教えです。これが私たちクリスチャンのキャラクターとなっているならば、

そのまま人の前でそのように生きれば良いわけです。それは既にもう起こっている良い行いです。また別の表現では、**エペソ 2 : 10** を見て下さい。

10: 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

これから良い行いをどこかに探しに行く必要はありません。もう既に“良い行い”は、あらかじめ備えられています。その備えられたものを私たちは、受け取って実行すればいいわけです。この“良い行い”は、この世が基準とするものとは違います。所謂^{いわゆる}この世が『善行』というものとは勿論違います。この世が言う“良い行い”とは、所謂素晴らしい働き、社会に役に立つ働き、成果が伴う働き、それが大体この世が言うところの“良い行い”であるかもしれません。でもその奥底にあるのは、自分がスポットライトを浴びるためのものです。神ではなくて、自分が褒められる、自分が感謝される。神の名声ではなくて、自分の名聲が上がる。そのためには、“良い行い”に励む。「すごいですね」と言われたいから。「素晴らしいですね」と言われたいから。感謝されたいから。多くの人は、ボランティアをしたり、慈善活動をしたり、寄付金や募金をしたりするわけです。でもそれはこの世の基準に従う“良い行い”というものです。でも神の基準とする“良い行い”は、そうではありません。もう一度**マタイ 5 : 16**を見て頂くと、『**天の父をあがめる**』という言葉が使われていますが、その“あがめる”は、“栄光をあらわす”という言葉です。「**天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい**」、「**天の父の栄光をあらわすようにしなさい**」と訳すことが出来ます。地上にいる自分の栄光をあらわすためではなく、自分の名を上げるためではなく、自分が感謝されたり、認められたり、称賛されたりするためではなくて、天の父があがめられるように。天の父に栄光が帰せられるように、良い行いに励む者。それが世界の光としての“良い行い”ということです。ですからここで私たちの考える“良い行い”と聖書が、イエス・キリストが説く“良い行い”というものにギャップがあったならば悔い改めなければなりません。「てっきり私は良い行いをしていると思ってました。だってあんなに人に喜んでもらってますから。」そのことは勿論、人に喜んでもらえるならばそれにこしたことはないかもしれませんが、でもその背後にあるもの、その心の奥底にあるものは何でしょうか。天の父があがめられるための“良い行い”だったのか、それとも自分があがめられるための“良い行い”だったのか。「あなたってすごいですね。そんな隠れた才能があるとは思いませんでした。」とか、「そんな有能な人だとは思いませんでした。素晴らしい人ですね。あなたに感謝します。あなたがいてくれなかったら、あなた無しでは、あなたが本当に必要なんです。」そういった言葉を私たちは聞きたいわけです。そしてそれで良い行いをしているつもりでいてしまうのですが、でも実際のところは、天の父があがめられなければ、それは神の目には決して“良い行い”ではないということです。人の目には、この世の目には、“良い行い”と思われるのです。そうした私たちの内にあるいやらしい、醜い、そういう思いがイエスの言葉によって^{あら}露わにされます。自分は“地の塩”であろうか。“世界の光”であろうか。“塩け”を失ってしまっていないだろうか。折角の光を柀の下に置いていないだろうか。実際に自分が全くクリスチャンとしてなっていなかった。塩けも失い、光も隠していた。クリスチャンとして全然出来ていなかった。駄目クリスチャンだったと示された方は、もしかしたら「だから私は駄目なんです。だから私のような者は神に用いて頂けないんだ」と自己卑下に陥ってしまうかもしれませんが、それがイエスの狙いではありません。イエスの狙いは、「あなたにはそれが出来ないでしょう」と。「地の塩になりたくたってあなたには出来ないでしょう。世界の光になりたくたってあなたには出来ないでしょう。だってあなたはすぐに塩けを失おうとするし、あなたは光をすぐに隠そうとするし、あなたはすぐに自分の栄光をあらわそうとする。駄目でしょう。それじゃアカンでしょう。」それがイエスの狙いです。それがイエスの言わんとしてい

るポイントです。“駄目クリスチャン”という烙印を押すのが勿論ポイントではなくて、結論じゃなくて、だから私たちにはイエス・キリストが必要なんです。「良い行いをしたくても出来ないんです。人に気に入ってもらいたいの出来ない。神様に喜ばれたいの出来ない。」いろんなことで私たちは悔やんで、悲しんで、涙を流すかもしれません。でも結局私たちのような者を、“地の塩”とし“世界の光”とすることができるのは、イエス・キリストだけであります。“塩”と“光”には共通点があります。当時のイスラエルの塩というのは一般的に死海から採られるものです。皆さんも死海に行ったことがあれば、塩の塊り、塩の結晶も目の当たりにしたと思います。すべて真っ白ではありません。不純物もたくさん含まれています。そのようないろんな混ぜ物がある塩の塊りというものにとって、塩として精製して不純物を除去するわけですが、そのようにして私たちもイエス・キリストによって不純物を取り除かれて、塩けをしっかりと保てるように、イエス・キリストが私たちを清めて下さる。そして光にしてもそれはここではランプの火をともして光を灯すとありますので、それは燃焼によって光は生じるわけです。燃焼ということは、勿論油がだんだん自らを失っていく、削っていく姿ということでもありますので、まさに光として輝きたければ自分をますます失っていかねばならないわけです。地の塩として塩けを保ちたいならば、自分の中にある不純物をどんどん除去していかねばならないわけです。で、それが出来るのはイエス・キリストだけであります。イエスが私たちの内に住んで、働いて下さいます。ですからクリスチャンになってもまだまだ私たちは不純物をたくさん抱えているわけです。不要なものが一杯あるわけです。そうしたものをすべてイエス・キリストが、取り除いて下さいます。そしてイエス・キリストは私たちに聖霊も与えて下さっています。その聖霊は私たちに“火のバプテスマ”も与えて下さいますので、この“火”によって燃焼されて、私たちはどんどん“自分”というものを良い意味で失っていくわけです。自分が消えてキリストがあらわれる。自分ばっかりの世界。恐ろしいですね。世界は自分だけ。自分ばっかり。でもその世界で私たちは生きてきたわけです。何でも自分、自分、自分で生きてきたわけですが、クリスチャンになってからは何でもキリスト、キリスト、キリストになるわけです。それが地の塩としての生き方であり、それが世界の光としての生き方であります。ある人たちは、「自分が消えるのが怖い。自分の個性を失いたくないのです。」と言うかもしれませんが、その“個性”がいかほどのものか、よく考えて見て下さい。むしろイエス・キリストの個性と言うか、性質と似る者ならば、こんなに幸いなことはありません。イエス・キリストに似ることと、自分の個性をあくまで誇示することと、どちらが価値あることか、考えれば一目瞭然だと思います。喜んで私たちは自分を無くしていくことを選びたいと思います。自分を捨て自分の十字架を負ってイエスについていく。それが『キリスト者としての道』であり、『弟子道』というものであります。ですからその点においてずれていたならば、「悔い改めなさい、考え方を換えなさい、方向転換をしなさい。天の御国が近づいたから。」天の御国では、あなたの個性はどうだっていいわけです。天の御国では、あなたのものとか、あなたのこだわりとか、そんなものは天にはありません。ですから、そんなものを今でも固く握りしめて、後生大事にしまい込んでおくというのは、もったいない話であります。むしろそんなものはどんどん手放して、自分を消していき、自分を無くしていく、我を忘れてキリストをほめたたえる。それが天国において永遠に価値のあることとなりますので、私たちはもう既にこの地上にいながら永遠に価値のあることを選ぶことが出来るわけです。もうそのように生きることが出来るんです。なぜならば、もう既にあなたは“地の塩”だからです。もう既にあなたは“世界の光”であるからです。これからそうなるのではないのです。もう既にあなたはそのようなものだ、イエスが断言して下さいます。

次に17節に目を移して下さい。

17：わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。

福音書の中で特に“律法”や“預言者”という言葉が出てきたら、それは旧約聖書全体のことを指す用語であります。厳密には、狭義的に“律法”と言えばモーセ五書（トーラー）といったところを指しますけれども、でも“律法”や“預言者”というのは旧約聖書全体を指すユダヤ人の慣用語であります。言い換えれば、聖書を廃棄するためにイエスが来たのではないと。むしろ成就するために来たと言っているわけです。18節には

18：まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

イエス・キリストは旧約聖書におけるすべての律法の規定、すべての預言を実現する、実行する、成就される、^{たが}違えることなく 100%成就する、と言っているわけです。つまりイエスは完璧なことをなさる、と言っているわけです。そしてもう一つ心に留めて頂きたいことは、イエスの言われている聖書というのは、廃棄されないものだということも覚えて欲しいと思います。「聖書の教えなんか時代遅れだ」と言って廃棄してはいけないわけです。最近ブログにも書いてますけれども、“自由主義神学”という立場の人たちは、「聖書はすべて神の靈感によって書かれたのではない。聖書はすべて神の言葉だとは限らない。人の創作も多分に含まれる。ある部分は靈感によるかもしれないけれども、でも大半は人が後から編纂したものである。ですから完全なものではない。神的な権威なんてものはない。絶対的な権威なんかないんだ」と。

「ですから聖書は書き換えられて然るべきである。時代時代において自由に解釈して構わない。聖書には同性愛は罪である」と書いてあるかもしれないけれども、それは神の靈感によるわけではないから、その時代時代において、今同性愛を罪だと言ったらそんなことは性差別になる。」と。ですからそのように聖書を時代に合わせて、聖書の規定・律法の中にもハッキリ同性愛が罪だと書いてありますけれども、でもそれは廃棄されて然るべきだという人たちからしたらもう罪ではなくなるわけです。まあ、それが一つの例として今挙げましたけれども、イエス・キリストはハッキリと律法、預言者、すなわち旧約聖書は廃棄されるものではないと。むしろイエス・キリストは、そのすべてを実行し、成就するために来た。真の意味でイエス・キリストだけが律法主義者です。悪い意味で言っているのではありません。イエス・キリストはゴリゴリの原理主義者です。聖書の言葉を一言一句神の靈感によるものとして受け止め、そしてそれをすべてイエスご自身が成就されると言っているわけです。そんなことは、私たちには出来ません。でもイエスには出来るわけです。で、イエスは確かにそうして下さったわけです。だからこそ、イエス・キリストが私たちにとって必要不可欠なお方。イエスこそが私たちの救い主としてふさわしいお方です。イエス以外のものを頼るということは全く愚かしいことです。なぜならばイエス以外のものは不完全であるからです。不完全であれば当然^{ほころ}綻びもでます。間違ふこともあるわけです。失敗もありますし、頼りにはなりません。でもイエス・キリストは、完璧に聖書の言葉を成就したわけですから、イエスは信頼に足る方です。で、ここでもう一つ注目して頂きたい言葉は、“一点一画”という言葉です。この“一点一画”という言葉は、ギリシャ語のアルファベットの『イオタ』”iota”という言葉からきていますけれども、それは英語のアルファベットで言うと”i”のような形をしています。勿論これはユダヤ人のイエス・キリストが語っていますから、それをギリシャ語にただ翻訳して記しているのがマタイの福音書でありますから、当時の人たちはユダヤ人の母国語であるヘブル語でこの話を、このメッセージを聞いていたわけです。ヘブル語で“一点一画”というのは、『ヨッド』（י）というアルファベットになります。ヘブル語の文字では最小の文字です。つまりイエスの言わんとしていることは、そのヘブル語のアルファベットの最小文字の『ヨッド』ですら失われることはない。すべて文字通り、アルファベットの一つ一つも神の靈感によるのだ、というのがイエスの主張です。**第2テモテ3：16**読み上げますから聞いて下さい。

16 : 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

これはパウロという人が言いました。もちろんここで言う聖書も旧約聖書のことを指しています。まだ新約聖書は完成していないので、聖書と言えば勿論旧約聖書を指しています。で、旧約聖書はすべて**神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です**。パウロの聖書観というのは、イエスの聖書観と全く同じです。イエスは、聖書はすべて廃棄されるものではないと。またマタイの福音書の後ろの方で、イエスがハッキリと言っていますが、「たとえ天地が滅び失せてもわたしの言葉は滅びることはない」と。イエスの言葉、すなわち福音書の言葉、新約聖書の言葉も旧約聖書と同じように滅びることはない。それは神の言葉であるからであります。ですから聖書も信頼に値する書物だということを知って下さい。ただの読み物じゃないんです。ただの宗教書じゃないんです。ただの道德の教科書でもないんです。ただの古典ではありません。聖書もやはり他の本とは全く異なる、神の靈感による神の言葉であります。イエス・キリストというお方もただの人ではないということです。世界の4大聖人、ソクラテスだとか、孔子だとか、ムハンマドとか、またはお釈迦さん。そういった人たちと肩を並べる者、それがイエスではないんです。キリスト教の開祖じゃないんです。ムハンマドは確かにイスラム教の開祖かもしれませんが、お釈迦さん、ゴータマ・シッダールタは確かに仏教の開祖と言われて然るべきかもしれませんが、彼らただの開祖、宗教を始めた人、教祖でありますから、ただの人間であります。彼らは一応にして死にました。でもイエス・キリストは、キリスト教の開祖じゃなくて、キリスト教の神です。そしてイエスは人としては死にましたけれども、三日目にはよみがえって、そして復活の姿を証拠として大勢の人たちに示して、その上でイエスは天に上げられたわけでありまして。ただの人ではない、ただの宗教家ではないということをはっきりと証明された上で、100%神であり100%人間であるということユニークな神と人の間に立つ仲介者、ユニークな救い主であるということ、他にはいない独特な存在としてイエスは御自身を証しされたわけですから、そのイエスが「**聖書はすべて廃れない**」と明言しているわけですから、私たちはそれに従って聖書を読むわけですから、学ぶわけですから。だから私たちはこんなにも熱心に聖書を学ぶわけですから。それは、私たちの救い主が聖書をこよなく愛し、大事にしたからであります。で、先ほどこの“**一点一画**”という言葉が、ヘブル語のアルファベットの『ヨッド』であるという話をしましたけれども、このところから聖書がすべて神の靈感によるものだという話に展開をさせました。もう一つ興味深い事実として皆さんに是非ともシェアしたいことがあります。律法と呼ばれる『モーセ五書』(トーラー)と呼ばれる箇所があります。創世記から始まって申命記までの『モーセ五書』を律法と言います。それをユダヤ人は“トーラー”と呼びます。“トーラー”とは単に『教え』という意味ですけども、その“トーラー”という言葉はヘブル語のアルファベットでは4つの文字で表現されます。で、それを今は便宜的に英語で分かり易く置き換えて表現すると4つの単語、“トーラー”を表すことばは、“T”, “O”, “R”, “H”となります。で、その“T”, “O”, “R”, “H”という“トーラー”を表す言葉が、実は創世記からずっと見て頂くと、先ず『初めに神が天と地を創造した。』という言葉から創世記は始まります。それを原語で、ヘブル語でずっと一文字一文字追っていきますと、49文字数えて50文字目に“TORH”の“T”が来るわけですから。さらにまた49文字数えて50文字目に今度は“O”が来ます。さらに数えて49文字、50文字目には何が来るか、“R”に来て欲しいですね。実際に“R”があるんです。さらに49文字数えて50文字目に“H”が来るわけですから。“T”, “O”, “R”, “H”等間隔で等距離で配列されている。「ただの偶然じゃないですか」、と思うかもしれませんが、でもそれは偶然ではありません。なぜならばその後もずっとやはり50文字目に“T”が来て、次の50文字目に“O”が来て、次の50文字目に“R”が来て、その次の50文字目に“H”が来る。ずっとこれが途切れることなく創世記を貫いています。驚くべき配列です。人間わざではありえないことです。このように緻密に数学的にデザインされているのが『創世記』という書物です。まさに神の言葉というにふさわしいものです。「でも、それも

偶然じゃないですか。創世記だけのことでしょう。」とあなたは言うかもしれません。「五つあって」トーラー “じゃないですか。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記。その『モーセ五書』が” トーラー “じゃないですか。であるならば、すべてその『モーセ五書』にこの”T”,”O”,”R”,”H”が同じようにして配列されていればそれは認めます。でも創世記だけではどうも。」という人があるかもしれませんが、驚くべきことに次の第2の書の出エジプト記も見て頂くと、やはり50文字目に”T”が来て、その次の50文字目に”O”が来て、また次の50文字目に”R”が来て、その次の50文字目に”H”が来ます。すごいですね。「そうなんですか。ではレビ記もそうになっているんですね。」と思ったらそうっていないんです。「なんだ。残念だな。」と思うかもしれません。ところがレビ記を飛ばして民数記を見て頂くと、また驚くべき発見があります。50文字目に何が来るかというところ、”H”が来ます。その次の50文字目に”R”がきます。さらにその次の50文字目に”O”が来ます。50文字目を見て頂くと”TORH”の逆さ”H”,”R”,”O”,”T”という配列がこれも50文字毎に今度は逆行してずっと貫かれています。ですから創世記と出エジプト記は50文字間隔で”T”,”O”,”R”,”H”が規則正しく並べられております。でレビ記はそうになってませんが、次の民数記になると今度は同じく50文字毎に今度は”TORH”の真逆に、逆行するようにして後ろから順番に”H”,”R”,”O”,”T”と来るわけです。で、申命記も実は同じようにして”H”,”R”,”O”,”T”が49文字終わって50文字目に必ず配列されとります。それを等距離文字列法というふうにも呼びます。英語ではスキップコードとも言います。ちょっと前に日本でも翻訳された『聖書の暗号』というのがありました。マイケル・ドロズニンという人が書いた本ですけど、それはとんでもない本ですから、そのことを言っているのではありません。勝手に聖書の中に暗号が含まれているんじゃないかとか。まあ、そのようなかわいしいものとは全く別に、これは極めて科学的にコンピュータでもハッキリこのことを調べることも出来ます。もう一度言いますと、創世記と出エジプト記は50文字毎に”T”,”O”,”R”,”H”の4文字が規則正しく配列されています。そして民数記と申命記は”TORH”の後ろから、逆から”H”,”R”,”O”,”T”が同じ50文字間隔で配列されています。それを今皆さん頭の中で想像してみてください。ずっと一本の線に今例えて想像して頂きたいと思います。創世記から始まって、ずっと”T”,”O”,”R”,”H”と。出エジプト記もずっと”T”,”O”,”R”,”H”と来るわけです。で、レビ記は置いといて、その次に逆に民数記から”H”,”R”,”O”,”T”がずっと、申命記も続きます。ずっと真っ直ぐな一本の線を今頭の中に想像してみてください。そうするとちょっと絵画的に想像すると、それは矢印のように見えるように想像してみてください。”T”,”O”,”R”,”H”、”T”,”O”,”R”,”H”ずっとベクトルで言えば創世記から出エジプト記へと向かっているわけです。民数記、申命記は逆転していますから、ベクトルが申命記から民数記へ向かっています。つまり”T”,”O”,”R”,”H”が挟んで真ん中を指しているわけです。で、真ん中にあるのは勿論レビ記です。でもレビ記は50文字配列では全然意味をなさない、不規則であるということが分かっております。ところがレビ記を見てもある一つの等距離の文字列が実は存在します。スキップコードなるものが存在します。それはどのような配列かと言いますと、50文字毎ではなくて、レビ記の場合は7文字毎に今度は、”トーラー “じゃなくて” ヤーウェ “をあらわす4つのアルファベット”Y”,”H”,”W”,”H”そのうちの”Y”が『ヨッド』という言葉であります。『ヨッド』が”Y”に相当するわけです。イエス・キリストは、“一点一画”も廃れない。『ヨッド』ですら、一番最小のアルファベットですら廃れないと言いました。それが廃れたら大変なことになるんです。”Y”,”H”,”W”,”H”をあらわす神の個人名です。旧約聖書ではその” ヤーウェ “を太字で『主』と表現しています。” トーラー “のベクトルは、真ん中にあるレビ記を指していると先ほど言いました。そのレビ記は” ヤーウェ “を等間隔で表現してるんです。つまり” トーラー “が指し示すものとは、” トーラー “の中心とは” ヤーウェ “であると、『主』であるということです。そして、この” ヤーウェ “こそイエス・キリストのことでもあります。父なる神も” ヤーウェ “と呼ばれますし、子なる神イエス・キリストも” ヤーウェ “『主』と呼ばれますし、聖霊なる神も” ヤーウェ “と呼ばれます。ルカの福音書 24 : 44 をお読みします。

44：さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」

もう少し前の 27 節を見て頂くと

27：それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

とあります。旧約聖書に書かれていること。若しくは“トーラー”に書かれていることは自分のことであると、イエスは言われています。またヨハネの福音書 5：39 ではイエスはこう言われました。あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。(聖書に救いがあると思って聖書を調べています、と言っているわけです。) その聖書が、わたしについて証言しているのですと。さらにヨハネ 5：46 というところで、もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。『モーセが書いた』とは、『モーセ五書』、創世記から始まって申命記のことを、『モーセが書いたもの』、『モーセ五書』、“トーラー”と言います。で、その“トーラー”というものは、イエスに関することが書いてあるんだと。創世記のテーマもイエス・キリスト。出エジプト記のテーマもイエス・キリスト。レビ記のテーマもイエス・キリスト。民数記のテーマもイエス・キリスト。申命記のテーマもイエス・キリストであると。そしてイエスは『主』ヤーウェ“です。私たちは実際にクリスチャンになる時に、イエスを主と心で信じて口で告白したはずであります。そのことはローマ 10：9 にも書かれています。

9：なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。

クリスチャンになるとはこういうことです。簡単なことです。救われるとはそんなに難しい事ではありません。信じるだけで救われるとよく言いますがけれども、そこに書かれている通りです。で、10 節にも

10：人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

11：聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

12：ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。

13：「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。(ローマ 10：10～13)

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」南無阿弥陀仏では救われません。阿弥陀仏の名前を唱えても救われません。でも「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」勿論『主』というのは皆さんも読めばわかる通り、子供でも分かる通り、勿論ここでいう『主』はイエスのことであるということ、疑いの余地は無いと思います。ところがこの 13 節の鍵かっこを見て頂くと、これは旧約聖書からの引用であるということが分かります。その引用というのは、ヨエル 2：32 からとられております。ここを参照して頂きたいと思います。ここからとられているわけです。

32 : しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。

で、よく見て下さい。『主』というのは太字になってます。これは先ほども紹介したように『主』 ヤーウエ “であります。英語で言うところ”YHWH”。文語訳聖書では『エホバ』と言ってます。”YHWH”。それが”ヤーウエ “の名前であります。”ヤーウエ “の名前を呼ぶ者はみな救われる。この言葉がそのままパウロによってローマ書に引用されて、「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。で、その『主』というのは、”ヤーウエ “というのは、イエスであると、パウロは言っているわけです。これも是非エホバの証人に伝えて下さい。「イエスは神じゃない。エホバ一人。」でも聖書では、エホバこそイエスであると言っているわけです。子供でも読解力がある程度、国語の能力があれば分かることです。文脈を見て下さい。イエスが主だとハッキリ言われています。で、その『主』とは旧約聖書の”ヤーウエ “である。若しくは 100 歩譲って『エホバ』と言っても良いと思いますが、「イエスこそエホバである」と。でも『エホバ』というのは誤読であるということは間違いありません。これは、エホバの証人も認めております。なぜならば「ハレルエ」と言わないからです。「ハレルヤ」といいます。「ヤ」というのは”ヤーウエ “の「ヤ」です。「ハレル」とは、ヤーウエをほめたたえなさい、ヤーウエが輝きでるように、「ハレル」というのは文字通り「晴れる」と同じ言葉なんです。太陽の輝きを指す言葉ですから、ヤーウエが輝くように、天の父が輝いてあがめられるように。それが「ハレルヤ」であります。でも私たちは「ハレルミー」、私が輝くように、私が目立つように、私が褒められるように、「ハレルミー」「ハレルミー」と言っていたわけですが、でもクリスチャンになってからは「ハレルヤ」「ハレルヤ」ですね。話が半分あちこち飛んでしまいましたけれども、しかしイエス・キリストは聖書を神の言葉として額面通り受け止め、そしてその聖書はまさにイエス・キリストについて書かれた書物であって、イエスはその中に書かれているすべてのことを真理として受け止めるだけでなく、それを身をもって実行し、すべての預言を成就して下さったということでもあります。私たちはイエス・キリストという信頼すべき救い主が与えられております。ですから「私は駄目です。出来ません。だから駄目クリスチャンなんです。」とは言わないで欲しいと思います。それは確かに事実かもしれません。きっと事実だと思います。でも、それでもあなたには救い主が与えられているということ覚えて下さい。そしてあなたには信頼すべき神の言葉も与えられているということ覚えて下さい。ここに書かれていることが真理です。そしてイエスもそのことを承認されています。イエス・キリストが私たちに出来ないことをすべてして下さったわけですから、この方により頼めばそれでいいんです。出来ないことにおいて悔やむ必要はありません。出来ないことは何でもイエス・キリストがやってくれたので、私たちは出来る方に頼みます。お願いします、助けて下さい、それでいいわけです。それが『信仰』というものです。信仰というのは実に単純明快なものです。出来ないからこそ頼るだけです。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」と先ほどのところに書いてありました。イエスに信頼すれば失望しません。でも私たちはこれまで、この世の世界では、自分を信じる者ということを説かれてきました。そのように吹き込まれて、マインドコントロールされてきました。「努力は決してあなたを裏切らない。」森田健作はよく言っていましたけど。でも裏切るんです。努力しても裏切られます。自分自身にも失望することもあるでしょう。だって私もあなたも完ぺきではないからです。思う通りに、願うようにいかない。それで苛立ったり、それががっかりしたり、それで傷ついたりするわけです。人にもそういうことを要求します。人に信頼して裏切られ、一喜一憂ですね。でもイエスは信頼に足るお方です。で、聖書はただのベストセラーとはわけが違います。ただのハウツー本とはわけが違います。ですから私たちはそのように信頼すべきものを与えられていますので、それをしっかりと握って、「出来ない、駄目だ」で終わるのではなく、「それが分かったならば幸いである」と。それがちょっと乱暴な言い方ですけども、『八福の教え』が言わんとしていることです。「あなたは駄目です。」それが『八福の教え』が言わんとし

ていることです。「あなたはどうしようもないやつです。」それがイエス・キリストがこの『山上の垂訓』を通して私たちに語りかけていることです。「あなたは全くのヘルプレス”helpless”、 hopeless”hopeless”。でも私がいるよ。」と言って下さっているわけです。

その上で19節を見て頂くと、

19：だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。

「聖書のこの教えは現実的でないから書き換えようとか、これは現代の感覚で再解釈しよう。すべて神の靈感によるものじゃないから。自由でいい。」自由主義神学。そういうことを教えている人たちは、『天の御国では、最も小さい者だ』と言っているわけです。その後、『しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。』ここで順番を是非注目して頂きたいと思います。ただ守るように教えるのではなくて、その前に守るということです。教える者は、先ずはその教えを自ら実践しなくてはならないと言っているわけです。律法学者のエズラという人は、エズラは律法を調べてから、そして守って、その上で教えたと言っています。これは私たちに必要なことです。牧師はもとより、親と呼ばれるならば、「お父さんは、お母さんは、そうしていないじゃないか。言っていることとやることが違うじゃないか。」子供たちは、孫たちは、私たちにチャレンジします。「こうしなさい、ああしなさい、これはしてはいけない、あれはしてはいけない」と、上から目線で教えこもうとしますけど。でもそれに対して小さな子供たちは「だってお父さんなんてやってないじゃないですか。だってお母さんなんてやってないじゃん。言ってることとやることがちぐはぐ。言行一致してないじゃないか。」ということやうことを聞きません。完全に見下して、尊敬もせず、なめてかかってくる。でも、もし私たちが自ら教えることを先ず自分で率先して守っていくならば、下の者たちは必ずそれに従います。上司が部下に対しても同じです。先ず部下に命じる前に、自らが命じることを実践するという。先ず親が子供に何かものを説く前に、親が身をもって模範をもって示すということ。それがイエス・キリストのスタイルです。模範によって教える。それが基督教のティーチングスタイルとって良いと思います。ですからイエス・キリストもまさにそのようにして、先ずは教える前に自ら実践されたわけです。守って、守るように教えたわけです。そういう者は、天の御国で、偉大な者であると。

で、20節に『まことに、あなたがたに告げます。』まことにという言葉は原文では“アーメン”です。ギリシャ語では“アメン”。ヘブル語では“アーメン”。英語では“Amen”。万国共通です。“まことに”。ですから、お祈りの後に“アーメン”と言うのは、“まことに”という意味です。その通りです。今祈ったことは本気です。また、他の人の祈りに対して“アーメン”と言うのは、あなたの祈った通りです。ですから、もしその人の祈った祈りに賛同出来なければ、“アーメン”と言ってはいけません。それは嘘になりますから。私は度々“アーメン”と言いません。それは非聖書的な祈りだと思えば“アーメン”と言いません。黙っています。願わくは神様がその願いをとりなしてくださるようにと祈ります。そして、神の御心に叶うようになりますようにと言いますけれども。で、ここで“アーメン”という言葉が“まことに”と訳されて使われているのは、これは強調しているということです。まことに、あなたがたに告げます。ヨハネの福音書なんかでは、まことにまことにと、“アーメン、アーメン”ダブルアーメンも使われています。それは余計に強調しているということです。私風の言い方をすれば「耳の穴をかつぽじって聞け」ということです。今から言うこと、これが私がこの説教の中で一番強調したいこと、これこそが『山上の説教』のハートの部分だ、核心の部分だとイエスが言わんとしていること。そのためにイエスは“まことに”

という言葉を使っています。

20：まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません。(マタイ 5：20)

「律法学者とかパリサイ人とは、一体どういう人たちなんですか」と知らない人は思うかもしれません。律法学者とは文字通り聖書のエキスパートです。旧約聖書をほとんど暗記しているような人たち。彼らよりも優れていなければ、あなたは天の御国に入れないと言っているわけです。またパリサイ人というのは宗教家です。イエスの時代、7000人ほどいた人たちが彼らは律法に厳格な人たち。その多くは律法学者でありましたけれども、パリサイ人というのは律法に厳格に生きる人たち。いわゆる敬虔な信者ということです。どこまで厳格かと言うと、自分たちが普段手にするもの、そのすべて十分の一を神にささげていた、そういう人たちです。調味料ですら、スパイスすら、十分の一は神様のもの、十分の九は私のもの。全部そのようにして何もかも分割して十分の一は神のものとしてプールして、あとの十分の九を自分のものとしていたような人たち。調味料ですらです。皆さんがスーパーに行って、コショウを買おうとします。そのコショウの十分の一を神にささげるようにして、先ずは分けるわけです。臨時収入がありましたと言ったら、その臨時収入の先ずは10%を神にささげるわけです。すべて神からの頂きもの。で、神から頂いたものの十分の一はすべて神のものでありますから、十分の一は神にささげる。そのようにしてパリサイ人たちは厳格に律法を守ってきたわけです。聖書では十分の一は神のもの。神のものをささげないということは、神のものを盗むことだと、**マラキの 3：8**にも書いていますので、彼らは厳密にすべて何事も十分の一を必ず神のものとして分別したわけであり、区分けしたわけであり、そんな彼らの義にまさるものでなければ、天の御国にすなわち天国には入れないと言っているわけです。それを聞いた時、私たちは「あー、私は天の御国に間違いなく入れない。だって私は聖書なんか丸暗記なんかとても出来ませんし。だって私はそんなふうにも何もかも厳格に神の律法に聞き従って、例えば十分の一なんかとても出来ません。じゃあ私は天国には入れないのですか。」そうです。それがイエスが言わんとしていることです。あなたは天国には入れないんです。あなたは自分だけでは天国に入れないんです。律法学者もパリサイ人たちも勿論自分たちの義を立てたところで、それだけでは天国に入れないんです。それだけでは天国に行くには不十分なんです。全然足りないんです。スタンダードが全然低いんです。それがイエスが言わんとしているポイントです。「まことにあなたがたに告げます。あなたがたは天国に入れませんよ」と言っているわけです。自分だけでは、我力だけでは、自分の努力だけでは、宗教熱心さだけでは、いくら聖書を読もうと、暗記しようと、沢山献金しようと、そんなことは一切カウントされない。あなたの行いではだれも、あなたは天国にはいけない、だれも救われないんだと。それがこの『山上の説教』のハートの部分、核心の部分です。別の言い方をすれば、天国に入りたければあなたは完璧でなければならない。イエス・キリストのように、律法のすべてを守り行う者でなければならないと。律法学者でもパリサイ人でも、厳格に厳密に律法を守ろうと努力はしていましたが、でも彼らも完璧ではないので、すべて守っていたわけではありません。特にパリサイ人たちは、律法の抜け目、法律の抜け目、抜け道というものを設けて、何としてでも自分が違反者とならないように、または違反したい時にはうまく法律を利用して^{ひそかに}潜り抜けるようにして、誤魔化しながら律法違反をしていないように見せかけたりもしていたわけです。そんな彼らのことを偽善者とイエスは言ったわけですが、そのような彼らですら不完全なわけです。でもイエスが言うには、完全な者でなければ、パーフェクトな者でなければ、天国には入れませんということです。

最後に**ガラテヤ 3：24**を開いて終わりにしたいと思います。

24 : こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。

律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となったとありますが、これはどういったことでしょうか。律法というのは神の基準です。神のスタンダードです。この律法を私たちは守ろうとするんですけども、結局は守り切れないわけです。パリサイ人たちも律法学者たちも何としてでも律法を守ろうと、ありとあらゆる努力をしたわけですけども、結局彼らは律法を守り切ることが出来なかったわけです。人間ならば誰でも同じ結論に至ります。やっぱり私は神の律法をすべて守り切ることが出来ない。ただしイエス・キリストだけは神の律法のすべてを守り切ることができたお方、そして罪を犯さなかった方です。律法によって私たちは自分がどんな者か悟ります。結局私は駄目なんだと。結局私は神のスタンダードからすれば全然出来ていない者なんだと。人と比べたら私はあの人よりマシ。あの人よりも聖書を読んでいる。あの人よりもちゃんと忠実に十分の一献金もささげているし、あの人みたいないい加減なクリスチャンじゃありません。人と比べればあなたはそれなりの者に見えるかもしれませんが。出来てる方だと見えるかもしれませんが。でも律法というスタンダードに照らし合わせたらどうでしょうか。若しくは律法をすべて守り行ったイエス・キリストという神のスタンダードと自分を比べたらどうでしょうか。全然駄目だと。そのことが、イエス・キリストがこの『山上の説教』を通じて、どうしても分かって欲しいことです。そして告げていることです。自分のスタンダードではなくて、神のスタンダードに立つように。自分のスタンダードで自己満足している場合ではない。そうじゃなくて神のスタンダードに自分を照らし合わせる時、自分がどのようなものであるかを知りなさい。そうすると私たちは真っ先に「あー、私は霊的破産者だ」と思うわけです。心の貧しい者だと思ふわけです。だからこそ、破産者だからこそ、お手上げだからこそ、「もう駄目だ、無理だ」だからこそ、イエス・キリストが私たちには必要なんです。それが先ほど読んだガラテヤ 3 : 24 の意味です。律法はあなたがダメ人間であることをハッキリ見せます。全体的外れのどうしようもない罪人であるということをハッキリ示します。ときに皆さん聖書を読んでいて、心痛むことがあると思います。書かれている通りに自分が出来ていないことに。このスタンダードから自分は全然かけ離れてしまっていることに気付くと思います。でも、それがまさにミソ、ポイントです。だから、「私には救いが必要なんだ。私は罪人だから、罪人の救い主となったイエス・キリストが必要なんだ。」それに気付く者は幸いです。それがイエスが言われている『心の貧しい者は幸いです。』霊的に破産している者は幸いです。なぜならば、**天の御国はその人のものだから**。それが『山上の垂訓』の全体のテーマですから、ずっとこのテーマをしっかりと心に留めておいてください。念頭に置いて下さい。いろんなことが語られているようですけども、このことしか語られていないんです。どの言葉を見ても、素晴らしい素敵な言葉。こう出来たらいいのに。最高の理想。これ以上高尚な教えはない。珠玉の言葉ばかりです。でも、その一方で、その言葉を実際自分は守り行うことが出来るだろうか。考えれば、「無理です。確かにこの言葉は素晴らしい。理想的です。でも自分にはとても守り行えそうにありません。だから読みたくありません。だから聖書は閉じます。」じゃないですね。だから私たちはイエス・キリストになおもすがるわけです。私は出来ない、そのことを認めます。だから出来るあなたにすべてをゆだねます。ここに書かれている通りに私は生きてみたいです。出来ないけれどもそうしたいです。そのような私たちの願いにイエス・キリストは喜んで耳を傾け、そして喜んで手を差し伸べてくれます。「それならば私が助けてあげよう。それならば私があなたの内に住んでいるから、私があなたを通してこのことをしてあげよう。あのことをしてあげよう」と。私たちの内に住んでおられるお方が、私たちを通して生きて働いて下さるということをあなたも経験できます。それこそがクリスチャンの醍醐味です。自分をはるかに超えた力が、自分の内から湧き起って来るのです。出来ないことも出来ちゃうのです。絶対に出来なかった。あの人のは絶

対に赦せなかった。そういうことも赦せるようになります。そういう人のことが不思議と赦せてしまう。あんなにも大嫌いだったのに。もう生理的に受け付けなかったのに。自分にはどうしても出来ない、やめられない、捨てられない。そう思っていたこともいつの間にか捨てられるようになる、いつの間にか変えられるようになる、いつの間にか『山上の説教』に倣った、沿った歩みが出来るようになる。それがクリスチャンの醍醐味であります。イエス・キリストはそれを私たちに味わって欲しいと願って、この説教を私たちに与えられました。まずは出来る者であるということを、私たちは自分のスタンダードに見合った自分の考えから出た者であるということを認めて、そうじゃなくてこの『山上の説教』こそ神の律法そのものであり、神のスタンダードそのものである。それと比べてまずは自分は出来ない者から始めるところに、クリスチャンの本当の信仰の一步が生み出されます。そのこともこれから先ずっと意識して頂いて、21節以降、結論はもう与えられていますので、出来ないところからスタートしなければいけません。出来ると思ってスタートすれば必ず行き詰りますし、“出来てるつもり”というのが一番恐ろしい高慢であります。へりくだって、開き直るのではなくて、ただお手上げしながら、その手はイエスをたたえるために上げっぱなしにして頂いて、イエスはその手をしっかりと握って下さって、そして手取り足取りイエスが教え、手取り足取り導いて下さいます。ゆだねさえすれば、明け渡すことさえすれば、信頼さえすれば、ここに書かれていることがあなたの日常生活の中に必ずあらわれてきます。ですから是非信じてこの教えを無駄にしないようにして頂きたいと思います。ただの道徳の教本を読んでいるのではないのです。これは私たちクリスチャンのライフスタイルそのものです。私たちクリスチャンの日常そのものであります。この教えが最も身近なものとならなければならない。それが本来の意図であります。日常とかけ離れた教えではないです。世離れた仙人のような人たちの教えじゃないんです。この世に暮らす、現実の世界に生きる私たちクリスチャンのためのスタンダードであります。では、今日はこれで終わりたいと思います。